

旬花報

14号

平成28年3月31日

発行

群馬県立女子大学
同窓会事務局

370-1193 佐波郡玉村町上之手1395-1
TEL:0270-65-8511
URL:http://shiou-kai.com/

紫桜賞



同窓会長
野村留美子



同窓会員の皆様、いかがお過ごしでしょうか。日頃から同窓会活動にご理解、ご協力くださりありがとうございます。

同窓会では、群馬県立女子大学の発展に顕著に貢献した学生に、その功績をたたえて毎年、紫桜賞を授与しています。

この「紫桜賞」は、同窓会として現役の学生と関わりを持てる有意義な事業を行いたいとの考えから、学生が一生懸命に何かに取り組むその励みになるように応援する気持ちを「賞」という形で表して行くこととし、平成15年から表彰を始めました。



萩原 梢さん

現在、自薦・他薦問わず公募の形で募り、厳正な審査の結果、受賞者を決定しています。近年、学生の活躍が目覚まし

く、新聞社、テレビ局などに注目され、日頃から群馬県立女子大学の名前を見聞きすることが多くなりました。自ずと紫桜賞の水準も高まっています。優秀つけがたく、一つの団体に絞ることが難しく2団体に授与することもあります。受賞者は次年度の入学式にて新入生の前で表彰されます。

それではここに平成27年度の紫桜賞受賞者・受賞団体をご紹介します。

平成27年度 紫桜賞

萩原 梢さん

国際コミュニケーション学部4年

萩原 梢さんは、平成27年度外務省主催の国際問題プレゼンテーション・コンテストにおいて最優秀賞を受賞しました。

このコンテストは、大学生に日本の外交政策や国際情勢に対する関心と理解を深めてもらうために外務省が実施しているイベントで、平成27年度は被爆70周年の節目でもあり、「私の提言」核兵器のない世界の実現に向けた日本の取組」というテーマで募集されました。応募者は49人で、まず小論文を提出、事前審査を経て、本選に5人が進みました。萩原さんは本選で、データや写真を用いて日本人学生と世界中からの留学生が広島・長崎両県に集まり、核拡散防止条約の学生会議を立ち上げるべきだという主旨でプレゼンテーションを行い、みごと最優秀賞である外務大臣賞を受賞しました。

国際問題プレゼンテーション・コンテスト

主催：外務省



優勝者集合写真

平成27年度 紫桜賞

道の駅「玉村宿」

女子大プロジェクト

国際コミュニケーション学部2年・4年20名

道の駅「玉村宿」を盛り上げる企画として、平成27年11月22日に「女子大プロジェクト」と銘打った大がかりのイベントを開催し、道の駅における大学と連携案件として大きな反響を呼びました。

当日は学生20人が様々なイベントの運営に当たりました。

道の駅で販売されているグルメのグランプリを決める「たまわんグランプリ2015」、女子大生が考えたレディースセットの販売（玉村産の食材豊富なランチ）などが企画され、会場は多くの人でにぎわいました。

このイベントは、玉村町にとって町政への若い視点の取り入れ、道の駅にとって知名度の向上、大学にとって学生の成長と地域への愛着の向上という効果があり、県立女子大は地域に貢献する大学として高く評価されました。

紫桜賞 受賞者・受賞団体一覧

平成26年度 紫桜賞

● 国際コミュニケーション学部デザイン論ゼミナール

平成25年度 紫桜賞

● 国際コミュニケーション学部 4年

前田 舞さん（アロハダンスサークル）

平成24年度 紫桜賞

● 国際コミュニケーション学部3年 林ひろみさん

平成23年度 紫桜賞

● 該当者なし

平成22年度 紫桜賞

● 美学美術史学科実技ゼミ

平成21年度 紫桜賞

● 女子大バトロールの会

平成20年度 紫桜賞

● 第27回錦野祭実行委員会

平成19年度 紫桜賞

● 第26回錦野祭実行委員会

平成18年度 紫桜賞

● 群馬県立女子大学 GGM

平成17年度 紫桜賞

● ほんやら堂最終選考組

ネットボール部

平成16年度 紫桜賞

● 第23回錦野祭実行委員会

平成15年度 紫桜賞

● ESS
ダンスサークル (Burning Soul)



「玉村宿」女子大プロジェクトの皆さん

同窓会 カフェ



平成 27 年 11 月 7 日（土）と 8 日（日）の両日、第 34 回錦野祭が盛大に開催されました。両日合わせて 7600 人を超える来場者があり、前年と比べて 542 人増加したそうです。

私たち同窓会も、7 日に 3 回目になる同窓会カフェを出店しました。今回は、美学美術史学科の卒業生で、卒業後も制作活動を行っている方達が、カフェの壁面に作品を飾ってくれました。さらに当日の接客にも参加してくれました。個性あふれる素敵な作品ばかりで、来て下さったお客様達も目を奪われたり話題に載せたりしていました。作品を通して、描いたメンバーとお客さんの会話が生まれるなど、例年以上にアットホームな雰囲気になったカフェになりました。改めて、大学を核とした絆を感じることができた一日でした。

また来年も…と考えていますので、機会がありましたら足をお運び下さい。

このたびは同窓会カフェに参加させていただき、ありがとうございました。再びこの大学内で展示できる日が来るとは思わなかったの、この機会に巡り合えたことを嬉しく思います。同窓会役員の方々やお立ち寄りいただいたお客様もとても優しく、あたたかい空間でした。

現在は、ありふれた日常や人々の思いを大切に描くことを信条として、イラストをメインに活動しています。在学当時はデザイン専攻で、今回のようなイラストの作品は表に出していませんでした。そのため、これが大学に展示されているというのが少し恥づかしいような、何だか不思議な気持ちです。

一緒に展示をした同期のメンバーもそれぞれの進化が見られ、自分も負けてられないな、と奮起させられました。ここでの経験を生かし、さらに精進していきたいと思っています。

RTsuki (リツキ) さん



大学を卒業後、同期生で会う機会というのがなかなか作れずにいたので、皆で集まって作品を展示させて頂けたことで、学生の頃を思い出して懐かしい気持ちになりました。さらに、お互いの「今」を知ることができ、制作活動に向けて良い刺激になりました。

展示にご協力頂いた同期の皆様、そして、展示の機会をくださいました同窓会役員の皆様には大変感謝しております。本当にありがとうございました。

＜作品についてと今後の展望＞

日々の暮らしの中で見たり聴いたりしたことや、季節の移り変わりから着想したことを描いています。

今後は、より多くの人に楽しんで頂ける作品展示を目標に、今まで以上に制作活動に励みたいと思います。

羽鳥あゆみさん

想像していたよりもたくさんのお客さんに来ていただき、充実した時間を過ごせました。今回初めて参加させていただきましたが、ほっと一息つけるような空間になっていて楽しかったです。卒業後、なかなか展示活動が出来なかったのこのような機会をいただき本当にうれしかったです。

＜作品について＞

ボールペンやアクリル絵の具、パソコンで小さめの作品を制作しています。ちょっと不思議な楽しい作品を目指して、今後はインターネット等による作品公開やカフェ等での展示活動にも参加していきたいと思っています。

oyo さん



今回初めて同窓会カフェに参加させていただきました。地元ではありますがなかなか足を運ぶ機会のなくなってしまった母校で OG の方々や学生たちと直接関わり合え、まるで学生時代に居たかのような楽しく懐かしい時間を過ごすことができました。また、同窓会という存在を以前より身近に感じられるようになったので、今後はもっと積極的に関わっていけたらと考えています。

わたしは今回作品展示で参加させていただきました。見た人の心があたたまるとような作品を目標に、絵画制作をしています。今後も展示やイベントに参加し、精力的に活動を続けていきたいと考えています。

この度は素敵な場にお誘いいただき、ありがとうございます。また来年の同窓会カフェも楽しみにしております。

natsu さん



こんにちは、瑞(るい)と申します。

県女では、大学院までお世話になっておりました。

絵を描く仕事がしたくて、週刊漫画のアシスタントをしたりしていましたが、今は絵のお仕事と漫画編集のお仕事をしています。

まだまだ夢追人です。

この度は、実は私が同窓会員だった縁がございまして、このような展示をさせていただけることになりました。

「みんな頑張ってるんすよ！すげえんすよ！」

ということを紹介したくて、様々な形で制作を続けている仲間から、数人ですが声をかけてみました。

展示はとても楽しかったです！やっぱり、見てもらえるのは嬉しいです。

これからも絵を描いていけたらと思っていますので、どこかで見かけたら何卒よろしく願います。

瑞(るい) さん

退官される先生

女子大の想い出

文学部総合教養学科 教授 植村恒一郎



1984年4月に女子大に赴任した私は、32年間に在職し、2016年3月に定年を迎えました。初めは一般教育に所属していましたが、美術・史学科に変更になり、2009年には新しく出来た総合教養学科に移りました。本来にあつたという間の32年間で、私の「哲学」の授業では、左右逆転メカネを掛けて、教室をおさるおさる動き回ったり、黒板に苗字を書いて左右逆転したり経験をした人もたくさんいると思います。また、この20年間は、映画、演劇、オペラなど芸術作品を素材に人間の問題を考える授業にも力を入れました。ジェン・オースティン「高慢と偏見」やモーツァルト「フィガロの結婚」などを覚えていた人もいます。

女子大の学生は、私の哲学の講義に、とても瑞々しく反応してくれました。たとえば、左右逆転メカネを掛ける実験は、非常勤で行った東大やお茶大の哲学の講義でも同じようにやりました。バクリーの網膜倒立像や、ストラットンの逆転メカネ実験の結果を学んだあと、一回は、まるまる左右逆転メカネを掛けるだけの授業をします。メカネを手にとりながら、「さあ、掛けた人は、希望者からどんな手を挙げて」と言います。ところが、東大では誰も手を挙げません。ほとんど男の子ですが、皆沈黙しています。いつも最前列で熱心に聞いている学生を指さして、「君、どう？」と尋ねると、首を振って断ります。友達の前で恥をかきたくないか？と不安なんです。彼らは。ところが、うちの女子学生は、そういうところはまったくなく、逆転メカネ実験は、僕の32年間の女子大の哲学授業の中で、もっとも楽しい思い出です。

あと、1996年頃までは、体育研究室主宰のスキー学校に皆勤で参加していました。宝樹スキー場や、岩鞍スキー場で、神山先生や戸所先生と一緒に、学生も初心者から上手い人まで、大いにスキーを楽しみました。私は最初はカメラマンでしたが、次第に上達して、初級班のレッスンを受けるようになりました。このスキー学校に参加された経験のある現役教員は、市川祥子先生と松崎慎也先生くらいになってしまいましたが、開学後の15年間に上達した、女子大の貴重な活動でした。

私は定年後も、東京女子大の非常勤講師や日本時間学会の理事など、教育や研究活動はまだまだ続けるつもりです。同窓会などで、卒業生の皆さんとお会いできるのも楽しみです。

私の最終講義

文学部国文学科 教授 高橋 顕志



大学では年度末に、その年に定年退職する教員による「最終講義」が行われることが多い。現役の学生たち、卒業生、同僚、時には事務職員の方々に声をかけ、普通の授業時間とは別に設定された90分間、退職していく教員が自分の学問とその到達点を語るのである。とうとう私もその年がやってきた。予定をたてようとして国文学科の同僚が話を断ってきた。理由は3つ。

第一、昨年6月に開催された国語国文学部の講演で私なりに、ひっそりと「最終講義」を行ったことが第二。第三の理由は少し複雑。私は29歳の時、高知女子大学に専任講師として赴任した。13年在職。その後広島大学に移り、ここでも13年。縁あって群馬県立女子大学に赴任したのは55歳の時であった。それから10年。都合36年間の教員生活である。さて「最終講義」をやるとなると高知時代・広島時代の教え子たちにも声をかけなければならぬ。高知も広島も群馬も、私にとってはみんな教え子。それを楽しみにしているという年賀状が今年十数通。しかし楽しみにしているという年賀状が高知や広島から来て頂くのはしるべのないのである。彼女たちはまだ若く、子育ての真っ最中、経済的にそんなに豊かではない。その人たちは「最終講義」は行わない旨、丁寧なお詫言状を出しておいた。

時間割上、実質的な最終の講義は2月2日（火）1コマ目の「日本音声学講義」。最終だと思ふと心が高ぶるものがあったが、平常通り普通に授業をし、次週の試験についての注意を述べ、淡々と授業を終わった。

その瞬間であった。教室のドアが開き20数名（だったと思う）の学生が、文字通りなだれ込んできたのである。先頭には大きな花束を持った学生。はじめは何のことかわからなかったが、よく見るとそこには、ここ3年間私が隊長を務めた「やまさととんぼ」の隊員たちがいた。「先生、ありがとうございます」との声、状況がよく理解できた。同僚の一人が、うしろのドアから入ってきて「さあ、写真撮りますよ」を撮った。おさまりの最終講義ではない、このサブライズ。この大学には、こんなにも楽しい感動があったのだ。そして、サラバ！

谷田閔次先生と舒庵

文学部国文学科 教授 毛塚恵美子



女子大に本格的な茶室があることを知る人は少ない。学生会館二階の奥まったところにある「舒庵」という。初代学長、谷田閔次先生の命名である。

谷田先生に初めてお目にかかったのは、36年前の初夏、前橋高校跡の仮校舎の学長室であった。元お茶の水女子大学の学長でいらした谷田先生のお名前が、私の大学院修士課程修了書にあるので、「初めて」というのもおかしい表現ではあるが、それまでは、文字通り壇上の方でいらしたのだ。その意味では、やはり「初めて」であった。教員採用の面接であったので、緊張で何を話したのか覚えていない。校舎前の喫茶店で昼食をご馳走になったが、自分が何を食べていたのかは忘れてしまったのに、先生がサンドイッチをお召し上がりになったことだけは不思議に憶えている。

「女子大です」という電話で、正式採用になったのを知ったのが、その年の夏。東北地方を旅していたときだった。次の年の春に赴任した。教授会が本場に新鮮に感じられたのは、あの春が最初で最後であったように思う。二年目に当時の一年生（三期生）と一緒に茶道部に入学し、お稽古を始めた。四年経つと学生たちは卒業し、お稽古に、いつまでも私だけが残り、そのうち、先生（木暮昌子先生）のお宅でのお稽古に通うようになった。

「地は錦野に在りて三山を望み…（中略）…」と願はくは紅塵を絶ちて、頃く逍遙せん」という谷田先生筆の「舒庵」由来書の複写が私の手元にある。茶道部初代顧問、片桐庸夫先生から頂いたものだ。片桐先生が退職後の二年間を二代目顧問として務めさせていたのだが、今春、本学の卒業生でもある新井小枝子先生に三代目を無事引き継ぐことができた。谷田先生がこの群馬の地に寄せられた想いの後を託したく、この複写を新井先生と茶道部の学生に紹介した。全文の紹介は私は荷が重すぎるので、いくつか原文とともにその詳細について、どなたかがここに紹介くださることを楽しみにしたい。（写真は昨年、メルボルン郊外で撮ったものです）

大学を去る日を迎えて

国際コミュニケーション学部 教授 岡野恵美子



本年三月末日に私は定年となり本学を去ります。二月に行われた最終講義の際、「三十六年間にわたる勤務の…」というご紹介の言葉に、あらためて長い時間が過ぎ去ったことに気づかされました。まさに「光陰矢の如し」、何と時の流れの速いことでしょうか。

今では創設時の大学を知る教員は私で最後となりますので、覚えていない記憶を頼りに当時のことに触れたいと思います。昭和五十五年四月、本造の旧前橋高校校舎（前橋市）での開学式に出席し、清水県知事（当時）と谷田閔次初代学長に花束を贈呈し、大学の門出を祝いました。スタート時点では、文学部「一般教育」「国文学科」「英文学科」「美術美術史学科」の一学部四学科体制でした。私は「一般教育」の助手として採用されました。

本造校舎でのアットホームな雰囲気の間、その後、今の玉村校舎に移転し、環境も設備も女子大らしく一新されました。移転後もひきつづき大学の業務は前例の無い中、教員と事務局が手探りで一步一步作り上げながら進める状況でした。加えて学生達もてんこ盛りです。現在と異なりパソコンもない時代ですから、その難しさを想像ください。古い名簿を開くと、驚くべき人々が思い出されます。特に今も印象に残っておりますのは教務課長だった米山貴博氏の奮闘振りや、教員が次々に大量の書籍を購入するのを見て、「先生方はまだ本を買いあさるのか…」と私に尋ねた会計担当K氏の驚きの顔などです。

また現在も本学の社会貢献の柱の一つである公開講座が、「一般教育」学科の発案で始まったのもこの時期です。この時点では教員全員でボスターの配布等も積極的に実施しました。このように教員をはじめ事務局として学生の中心に加えていただいたことは私にとって忘れがたい思い出となっています。

その後、新設された国際コミュニケーション学部ではユーラシアに関する講義を担当し、その準備のためウズベキスタンに現地調査に出ました。またロシア文化遺産の講義のためそのルーツであるビザンツ文化遺産の現地調査を行いました。これらの成果の一端を授業で伝えることができ、大学を訪れる予定で。

スポット ライト

「ワン・ヤング・サミット」に参加した日向宥貴さん

(国際コミュニケーション学部国際ビジネス課程)

校内の国際交流倶楽部に所属し、本学に留学している留学生との交流活動を行っている日向宥貴さん。2015年11月17日から18日に、タイのバンコクで行われた「ワン・ヤング・サミット」に群馬県の代表として参加しました。この会議に参加した感想などを紹介します。

グラミン銀行を創設したムハンマド・ユヌス氏や国連事務総長だったコフィー・アナン氏のレクチャーを聞き、世界をより良くしていこうと考えている若者達と話をしました。参加者は、大きなビジョンをもち、行動している人ばかりでした。使われる言語は英語で、世界中の人と意見を自由に交わすことができました。4日間で得た知識と新たな視点、人脈は、私の今後の財産になると考えます。

開発経済学を勉強しているので、ユヌス氏の著書を読んだことがありました。著書からは堅い人をイメージしていましたが、スピーチを聞いて熱いハートをもった、人間味あふれる人だと感じました。「自己犠牲をいかに払ってできることを見つけるかが大切」という言葉が心に残っています。

会議初日に出会ったフィリピン人の女子大生と意気投合しました。数日後、彼女はデリゲートスピーカー（参加者から選ばれてスピーチした人）として、キリスト教とイスラム教の子ども達が仲良く一緒に本が読める図書館を建てたことを紹介しました。同い年の子が熱い思いをもって社会を構築している姿に大いに刺激を受けました。



ワン・ヤング・サミット

次世代の若いリーダーを育てる目的で、2009年にイギリスの経済関係者たちが設立した団体です。2010年から世界中の若者が教育や環境、人権、平和、政治などさまざまなテーマについて考えるサミットが始まりました。年1回開かれていて、これまでにイギリスや南アフリカなどの国が会場となっています。2015年の会議には、世界196カ国から1300人の若者が集まりました。



2016年は、 4年に一度の懇親会の年です。

2000年に開催された第1回目の懇親会は、学食を使って行われました。そこから形を変えながら開催され、数年前から「オリンピックイヤー」に集まることとなりました。

懐かしい先生も参加して下さり、毎回、穏やかで楽しい時間を過ごしています。

公私ともにお忙しい折りかと存知ますが、是非お友達を誘ってご参加下さい。多くの皆さんのご参加をお待ちしています。

編集後記

とある事情のため、ここ何年か某大学の通信教育部で英語の勉強をしています。

今年は、ずっと避けていた『英語購読』を受講しています。長い英文を読むのは大学の卒業以来〇十年ぶり。「よし。」と意気込んで、新しい英和辞典を買いました。

スクーリング当日、まだほとんど使っていない辞書とテキストの(拡大)コピー(小さい字をずっと見ていると目がショボショボしてくるので...)を持って、勇んで行きました。

ところが、教室ではわたしのような紙の辞書など持っている人はいません。若い人だけでなく、私くらいの年齢の人みんな電子辞書でした。私だって、「電子辞書」というものがあるのは知っています。便利なのは分かれます。あの小さな機械に莫大な情報量が...でも、紙が好きなんです。一枚一枚ページをめくるのが好きなんです。電子辞書じゃあ心元ないのです。なにせ英和だけあればよいので...

職場で辞書の話が出たとき、「紙の辞書じゃないと嫌なんです」と言ったら笑われました。でも、いいんです。きっと、今後もずっと紙派です。

ところで、紙派と電子辞書派はどこで分かれるのでしょうか。アンケートを採ってみました。

①同窓会では、大学が管理している名簿をもとに同窓生みなさんに送付しています。
ところが、毎回相当数の封筒が宛先不明で返ってきてしまいます。「最近、同窓会から手紙が来ない」というご友人をご存知の方は、是非連絡先をご一報ください。よろしくお願ひいたします。
②皆さんの原稿をお待ちしております。
「近況を報告したい」「同窓生にこんなことを知らせたい」そんな方は、是非同窓会までご一報ください。来年度の旬花報に掲載いたします。自薦、他薦は問いません。